第二回留学報告書
船井情報科学振興財団　奨学生　田場大我

ご挨拶

2020 年 9 月よりイェール大学の School of Architecture の M.Arch II プログラムに在籍することになりました田場大我と申します。新型コロナウイルスの影響によりヒヤヒヤしながらもなんとか渡米することができ、現在はリモート授業が主にはなりますが、なんとか楽しい学生生活を送ることが出来ております。とは言っても、それが実現するまでに多くの困難やフラストレーションがあったのも事実であり、そこまでの過程や今学期取り組んだこと等を今回の報告書にて紹介させていただきたく思います。

渡米前後

コロナの影響によって、ビザや住む場所の確保などが出来ないまま実際に渡米しようと考えていた 7 月末が過ぎてしまい、大学が始まるまでに間に合わせることができるのかが不安でした。その後、緊急面接枠で大使館とアポイントをとれたにも関わらず、I-20 のフォームに全授業がリモートじゃない事を記されていないといけないとのことで当日はビザを発行してもらえず、既に渡米が遅れているのにまたここで足止めをくらってしまうのかとうんざりしていたことを記憶しております。大学に問い合わせ新しい I-20 を送ってもらい、大使館で当日許可が降りる人達よりも十日程遅いタイミングでやっとビザを発給してもらえました。そこから至急航空券を取り、住む場所を探し 8 月の中旬には渡米しました。後ほど同級生に話を聞いたところ他国の学生はもっと大変で、緊急面接枠も無くアポイントメントをとれるのが数ヶ月先とのことで、秋学期はリモートでせざるを得なくなったらしいです。色々ありましたが、自分は運がいい方なのだと思うようになりました。

誰もいない空港は新鮮で案外スムーズに税関も抜けられ学校に到着しました。その後二週間隔離をする訳ですが、到着翌日にはコロナのテストを受け無事陰性だったため、ここでやっと一息つくことができました。イェール大学はコロナのテストサービスが非常に充実しており、現在では特に制限なく受けることができます（他の大学では症状がないと受けられなかったり、ランダムに学生が選択されテストを受けることができると聞いております)。大学では正式なオリエンテーションはなく、学期が始まるまでは Zoom を通して業務的な Meeting や授業選択が行われました。前年度春学期の後半からイェール大学はリモートを導入しており、オンラインプラットホームには慣れていた様子でした。

秋学期

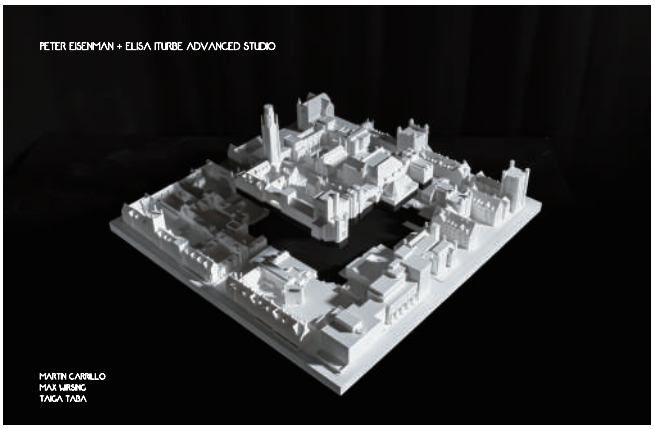
私が在籍するプログラムではスタジオ (多くの学生が重点をおく、建築的プロポーザルを製作する授業)、研究、そして講義二つの計 4 コースを選択することになっております。

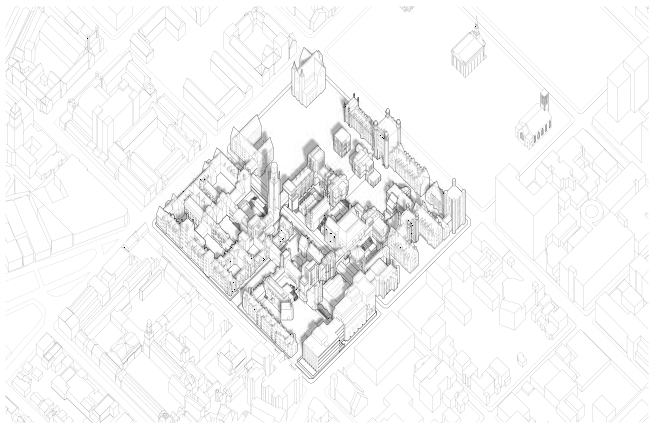
スタジオ

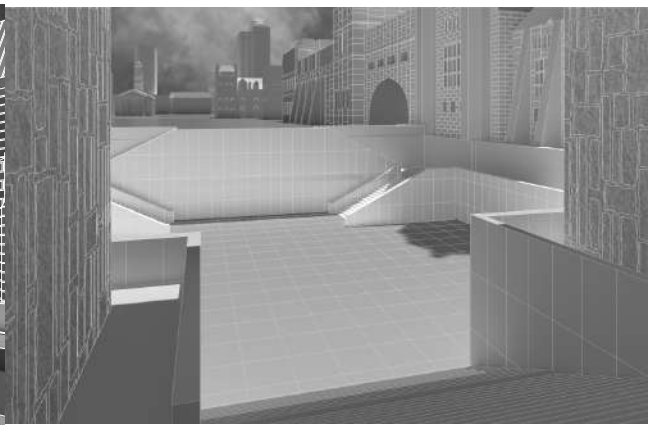
スタジオは 9 つの選択肢から順位付けを行うことによって自動的にシステムを通し割り当てられ、基本的には第一志望か第二志望には入れるようになっています。私は最終的には第二志望の Peter Eisenman 教授のスタジオに在籍することになったのですが、興味深いことに事前に開示される順位付けでは一番

不人気のスタジオでした。そのため、本来は第一志望だったのですが、開示結果に少し不安になり第二志望として申請しておりました。現在のイェール建築といえば Peter Eisenman と言っても過言ではなく、入学以前から彼の著書や作品には興味を抱いていたため、必然的に私は選択していたのですが、開示の結果には少し驚きと困惑をいまだに抱いております。不人気の理由はいくつか挙げられるのですが、一つは既に彼の授業を履修したことがある学生がせっかくなら他の教授も試してみたいとという人達です。これは真っ当な理由だと思い特に気にしていなかったのですが、それ以外の意見として彼（88 歳のおじいちゃん）の批評が厳しく耐えられないという学生も少なからずいました。そう言った情報をスタジオが始まる前に聞かされ、半ば怯えながら最初の Zoom Meeting が開催されたのですが、聞いた情報とは裏腹に非常にフレンドリーな方で私は大好きになりました。確かに厳しい時はあったのですが、真面目に考え抜かれたアイデアに関しては向き合ってくれました。そして、彼の観察眼には驚愕したのを覚えています。三日間自分が考察しても見えていなかった事を 3 秒で見つけ出してくれ、そのアイデアを育て、最終発表まで持っていくことができました。

スタジオ自体は 3 人でグループを組みプロポーザルを行なっていくのですが、私は M.Arch I という三年プログラムに在籍しているエクアドル人とアメリカ人の学生と組みました（両者とも三年目）。エクアドル人の学生は今学期はリモートで行なっていたことから、3 人間のミーティングは基本的に Zoom にて夜な夜な行いました。少々意見が合わず衝突することもありましたが、非常にバランスのとれたグループだったかと思います。最終的にはスタジオ内でも一番評価の高いプロポーザルになりました。



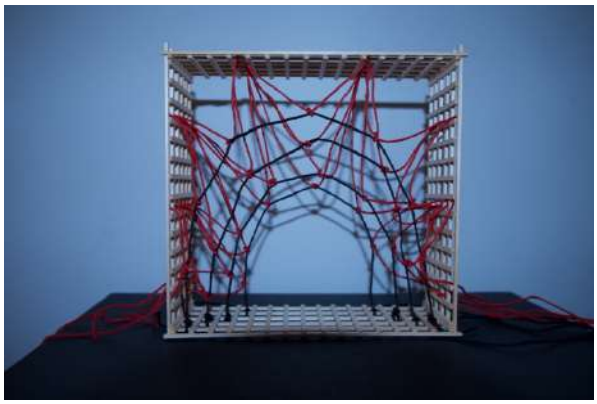




研究

一つの建築物の永続的利用は可能かという疑問を基にテキスタイルとバイオロジーを通してそれを実現する手段を現在研究しております。環境問題を緩和する糸口として建築業界の二酸化炭素放出量や炭素隔離を見直すためにも建築寿命の延長は必須だと考えており、テキスタイルの柔らかさと張力構造、そしてバイオテックを用いた生分解性を持たせた材料や自然界に倣って成長可能な建築を追求したいと考えております。この研究は 2 年間を通して最終学期に発表するものなので、また進展をアップデートさせていただきます。

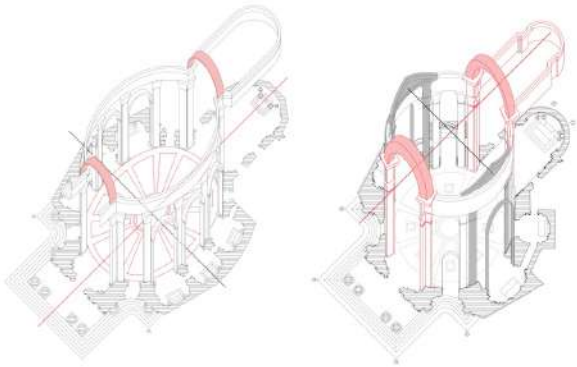
講義：Textile Architecture



こちらの講義は上記の通り、テキスタイルの興味より受講しました。テキスタイルの歴史と、そこからどのような接点が建築とあるのか、どう建築に応用できるかを研究しました。特にテキスタイルの基礎的な手法の「結ぶ」という行為に着目し、建築空間に落とし込めないかを考え作品を作りました。

この講義が唯一対面で一部行われたものだったのですが、リモートに慣れてしまったためか、逆に少し効率悪く感じてしまいました。コロナが収束しても、通常の生活に戻るには少し時間がかかるかもしれないですね。

講義：Formal Analysis I (形態分析)



こちらの授業も Peter Eisenman 教授が担当しており、学生が 40 人ほど履修する人気授業です。授業の名の通り建築の形態を分析するのですが、彼曰く建築を専攻するものは一般人とは違う建築の見方や解釈ができる必要があるということで、「見えないものを描け」という課題が出されます。15 世紀から 18 世紀の主にイタリア建築が対象で、様々な文献を読み漁り時代背景を追いながら、独自の見解で建築を紐解いていくという作業になります。建築を批評する力がつくのに加え、今後旅行で建築を周るのが楽しくなりそうです。

日常生活

現在は大学から徒歩 5 分ほどに位置するアパートに一人暮らしをしております。日本ではほとんど自炊をしなかったのですが、日本のように飲食店の選択肢が豊富だったり便利なコンビニがある訳でもなく、流石に現地の食事に飽きることもあるので半分くらいは自炊するようになりました。一番驚いたのはキ

ャッシュレス化の浸透具合で、アメリカに着いてから今までで現金を使うのは洗濯機を回す時くらいで、それ以外はデビットカード と Apple Pay で何とかなります。自炊に関しても、材料はインスタカートというサービスで自宅まで届けてもらっているので、極論家を出なくても生活はできるようになっています。

コネチカット州はアメリカの中でもコロナ感染の件数を低水準に抑えられていたこともあり、意識としては日本にいた時とあまり変わらない印象を持ちました。イェール大学があるニューヘイブンはカレッジタウンで栄えてはいるのですが、都会ではないので週末や祝日はニューヨークに遊びに行ったりもしました。それ以外にも、ホームパーティに参加し少しは友達もできました。まだ同級生でニューヘイブンに来れていない人達が多くいるので、皆が揃うことを楽しみにしています。

最後に

イェール大学に日本人の学生が少ないことが残念ではありますが、同じ FOS 奨学生同期の兼田さんにもお世話になり、不自由のない楽しい生活を送ることができております。それも船井財団のご支援あってのことだと思っております。いつも相談に乗っていただきありがとうございます。また、近いうちに皆さんと対面で会えることを願っております。